

山田輝彦著 『夏目漱石の文学』

海老井, 英次
九州大学教養部助教授

<https://doi.org/10.15017/12015>

出版情報 : 語文研究. 58, pp.66-70, 1984-12-25. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

山田 輝彦 著 『夏目漱石の文学』

海老井 英 次

本書は、著者山田輝彦氏がここ十三年間にわたる漱石研究を集大成されたものである。周知の如く、漱石についての研究論文は世に充ちあふれているが、そうした中で、ほぼ一年に一論のペースで進められてきた著者の漱石研究が、こうして一巻にまとめられたことは、漱石研究者にとってのみならず、広く近代文学に関心を有する人々、その中でも本学の後輩として著者の驥尾に付している私達にとって慶事である。

著者は、本書に先立って、『明治の精神—近代文学小論』（国民文化研究会、昭57・12）を上梓されており、鷗外・漱石から火野葦平に至る作家にふれつつ、「国」と「死」という問題についての研究及び所感を公にされている。そして、本書についても、「あとがき」において、「外庄によって強いられた日本の『近代』の顔を、彼（漱石）ほどトータルな形で描いた作家は稀有である。特に、戦後の漱石研究の領域から、意識的に排除されていた『ナショナリズム』の視点を導入しなければ、全体的な漱石像の構築は不可能ではないかというのが、筆者の問題意識の一つであった」と、その基本的な姿勢が明らかにされている。夏目漱石については、愛読者の一

人を自認しているものの、公に論じたことのない私には、もとより書評という形の本書への対応は能力に余るので、ここでは紹介という形で、少しばかり私的な感想を述べさせてもらうことにしたい。その点、著者のご了解を乞う次第である。

まず、本書の概略を知っていたために、その「目次」を写しておくことにしよう。

作家漱石の出発—「猫」・「溟虚集」を中心に—

「草枕」ノート—その創作動機を中心に—

「虞美人草」論—道義と詩趣—

「三四郎」論—低徊家の変貌—

「それから」論—その道徳観を中心に—

「門」覚書—いわゆる「日常性の原理」をめぐる—

「彼岸過迄」論—敬太郎の冒険—

「行人」私論

「こゝろ」試論—明治への鎮魂歌—

「道草」ノート

「明暗」私論

本書は、以上の十一論文より構成されているが、これを一見して判明のように、漱石の十一篇の長篇小説のうち、「坑夫」についての論を欠くだけで、漱石文学の全域を網羅しているものである。巻末の「所載論文一覧」によると、各論は必ずしも漱石の作品執筆の順を追って書かれてはいないが、こうして一卷にまとめられたものを通読すると、自ずから各論の中を貫流するものがあって、先へ読み進むことを促してくれるのである。そして本書が極めて読みやすい文体であることも紹介に値するであろう。作品に関連する漱石の言及がメモや日記その他に及んで用いられ、先行の研究文献などからの引用もあるが、それらがすべて著者によって十分に咀嚼されているために、そうした箇所での読みが中断されるような煩わしさもなく、読み進めることが出来た。さらに、各作品論はそれぞれ十分に的がしぼられており、明らかにすべきものは明らかにされ、言うべきものは十分に言っている。読み終った後も極めて明快な印象が頭に残っている。

まず、「作家漱石の出發」の冒頭に、著者はその漱石観を次のように明らかにして、漱石論の出發としておられる。

文明批評家としての明晰さと、存在論的な暗さ、漱石の自我にはこの両極の相剋が終生つきまとっていた。それはまた「公」と「私」というように図式化することもできよう。漱石文学の軌跡を辿る者は、初期の「野分」や「虞美人草」を境にして、公的なものへの志向が意識的に切り捨てられ、私的世界の深淵に測鉛を下す作業が執拗に続けられてゆく推移を確認できよう。しかし、公的なものへの関心が彼の深層に生き続けていることは、「ころ」一篇が何よりも雄弁にそれを語っている。その公的なものと

は、明治の文人が共有した天下国家への熱い関心、評家のいう「士大夫意識」であった。それは「国家」への強い帰属感であり、最も広い意味でナショナリズムと呼んで間違いないものであった。引用が少し長きに過ぎた憾もあるが、ここに著者の漱石論としての本書の要旨をそのまま読むことが出来るからに他ならない。執筆年月も一番新しく、本書のための新稿のようであり、上に紹介した漱石観は著者のもっとも最近のそれと推定されるものである。それでは、以下に各論を紙数の制限もあることなので要点及び問題点にしばって紹介してみよう。

「作家漱石の出發」では、漱石は「彼の文学の原イメージを漢文学―彼の言葉によると『唐宋数千言』と『左国史漢』―から学んだ。」とされ、「頑固なほど己れの体験と感性に固執した」し「異教徒」であることを押し通した」と、漱石の文人としての性格が規定されている。「吾輩は猫である」については、「子規の詩いた『写生文』という種から成長した、知識とエピソードの宝庫のような風変りな作品である。雑然とはしているが、万物を孕んだ『混沌』のような可能性にみちている」作品とされる。「濛濛集」中の『趣味の遺伝』に関連しては、漱石の「厭戦思想」なるものに疑念を示され、日露戦争を「基本的には肯定していた」との理解を示され、作品については、特にその末尾の一節にふれて、戦死者とその母とその許婚者との姿を「『幸』以外の何でもない」とされ、「余」が流す「清き涼しき涙」は、日露の戦いに斃れた戦死者への鎮魂の手向けでなくて何であろう」とされた上で、「漱石の思いは、イデオロギーで裁くには余りに深いように思われる」と結ばれている。ここに著者の、明治の文人としての、「公」的存在として

の漱石の原像があるかのようである。その後、「公」の問題は、「眞美人草」においては「詩趣」に対する「道義」として甲野さんに具象化されたものとみられ、「それから」では、「道徳」という形でみられて、「それを外在的規範としてではなく、内在的自然として把握しようとする姿勢」を「確立」(「こゝろ」試論)したとされる。その経緯をふまえて「こゝろ」の先生の「明治の精神」への殉死という姿に行きつくと言われるのである。「それが具体的な明治日本であれ、抽象的な天という理念であれ、公的な価値に対する漱石の関心は終生変らなかつた」とみられるわけである。そして、それに対して、「『それから』以後の漱石の作品の主人公は、漱石の観念世界から生み出された『内的孤独の純粹造型』ともいうべき特殊の『自我』像である」とされる。むしろ、「漱石の『自己本位』の『自己』とは他者に対する自己であると同時に、他国に対する自国の意識であり、インデヴィジュアルであると同時にナショナルであるという二重構造になっている」と言うのが、著者による「自己」観であり、論議を要する問題性の多い提言と言えよう。以上が、大略ではあるが本書を貫いている漱石像の核心となる理念と思われる。

以下、本書における著者の見解と、いささか異なる私見を敢えて対置してみるが、紹介者の方の恣意性については棚に上げてのことであることをお断りしておきたい。

始めに、『三四郎』論において、美禰子の結婚相手の「昔のすらりと高い細面の立派な人」の理解について意見を一に出来なかつた。著者も「この男の読みは、作品全体の理解に大きくかかわる」と言われている人物で、従来評家達の見解も分れているのである。著者

は、「彼岸過迄」緒言の「教育ある且尋常の士人」の面影が漱石のイメージにはあつたに違ひなく、少なくとも「俗物」と読むのは問題だとの見解を示しておられる。しかし、この男の「立派」さは、三四郎の視点からのそれであり、三四郎自身が人間としてかなり未熟であることを考慮に入れば、その「立派」さは、やはりかなり割引かないわけにはゆかないであらう。この男が、野々宮の妹よし子に結婚を断られた男であることは隠れもない事実であり、三四郎などとは「別の現実世界に生きる人間」として「立派」であるにしても、人間として全面的に「立派」であるかは、作者によって保留されている人物のように思われるのである。最終章で、画家の原口が美禰子を描いた「森の女」と題する絵をそのまま誉めている彼であり、三四郎程にも美禰子の実体を捉えていないことは明らかなのである。美禰子が教会の前でつぶやいた八愆の内容の理解にまで波及する存在であるがゆえに、この「立派」さについては解明が欲しいところである。ましてや、美禰子に係わる「無意識な偽善家」の問題を、「意識的な演技者」に還元した上で捉えなおすという魅力的な視点を設定されたことであるから、美禰子の結婚について、挫折とまではいかなくとも、そこに屈折を見ないでよいかどうか疑問は残されているのではないか。

次に、『それから』の十五章以下を「代助の処罰の物語」と捉え、「こういふ結末にはやはり漱石の道徳意識をよみとらないうわけにはゆかない」という見解について、やはりそのままは同意しかねるのである。代助と人妻である三代との△恋愛▽は、読者によってはそこに姦通の事実を読みとる程に、愛の確認がなされているが、作者はその時の二人を「恋愛の彫刻」と表現しており、姦通などとい

う肉体的次元の事実としてよりも、精神的な次元でそれを捉えていることが明らかである。そうした二人の受けなければならぬ「処罰」とは、一体何を「罪」とすることによって下されるそれなのだろうか。代助の行動を「罪」と断定し得る「道徳」とはどんな道徳なのか、そういう疑問が残ることである。二人の△恋愛▽を「馬鹿な事」「不始末」「悪戯」と決めつけて、代助を絶縁する兄誠吾と同じレベルで、漱石は二人の△恋愛▽を見ていたわけではなかったであろうし、読者としての私達もそういう道徳的リゴリズムから代助達を「処罰」することは出来ないと思われるのである。「それから」に限定してみれば、三千代の死と代助の発狂とを予想するのもあながち誤りではないかも知れないが、続く作品「門」の宗助・お米へ連なるものとして二人の△恋愛▽を捉えることも出来、さらには「行人」の周知の「パオロとフランチェスカ」の話の如く、「愛」と「罪」と「罰」との係わりは、漱石の場合、倫理的ではあっても、

道徳的リゴリズムとは縁遠いのが一般であり、「代助の処罰」という読み方は作品の世界をせばめるように思われるのである。問題が問題であるから、ここで少し余計な敷衍をするが、大正文学の側から見た場合、長井代助はほぼ全面的に読まれると思うが、明治の側からこの新しい青年を見た時に「処罰」の対象になるといふことなのだろうか。その点は「こゝろ」における、明治天皇の崩御と乃木殉死について、特に後者についての見方が、鷗外・漱石と白樺派以降の世代とは極だつて異なる事実で、すでに文学史的に確認されていることである。本書にも引用されているが、乃木が鷗外に「白樺諸家の言論に注意すべき」を促した事実にもみられるように、まったく価値観を異にする世代の抬頭があるのであり、新旧の

断絶は顕著でもはや一つの道徳でまとめようとするのは無理な状況だったのである。そうした中で、漱石本人が、武者小路実篤や志賀直哉を理解し、芥川龍之介達に愛情を有していたことこそ特筆されるべきであり、その漱石が代助をいかに造型したかという点の見定めが是非必要であろう。少なくとも「不断に形骸化の危機を孕んでいる『道徳』そのものの根底を洗い直そうとした、自らの道徳観の変革の行為としての創作であつて、その意識から「それから」の結末で「姦通」の事実を避けさせた点までは同感出来るのだが、「代助の処罰の物語」か否か、そこまで漱石の「道徳」をリゴリズムの中に封じ込めたかと思われる。

さらに、「彼岸過迄」「行人」「こゝろ」の、いわゆる△我執△三部作▽において特徴的な、視点の複合性、すなわちそれぞれの人物は各自の人格的スケールにおいてしか世界を見ないし人間を理解し得ない、という観点から、極めてリアリスチックに人間と人間との関係を描いていく、それゆえの重層的構成まで含めての漱石の創作意識について何らかの解説が欲しいところである。「彼岸過迄」及び「行人」において、構成の破綻ということがあるのかどうか日頃から疑問を抱いているのだが、「彼岸過迄」の「敬太郎の冒険」譚と「須永の話」や「松本の話」との関係にしろ、「恐らく漱石の最初の意図を裏切つて」という見方に代つて、渦巻状に人間の内面に迫っていく漱石が、極めて意図的に展開したもののように思われるのだがいかがであろうか。その点は、「行人」においては、いわゆる「二郎説話」の意味付けの問題にも波及するものと思われる。二郎はあくまでも副次的人物で、二郎にとつて「事件」が起らないのは極めて自然な展開なのではないであろうか。

著者の漱石論の白眉が「こゝろ」試論」にあることは、大方の意見の一致するところであろう。明治の終焉を惜しむ心情は、著者の内にも脈打つたように、「こゝろ」という作品は、明治という濃密な時代を生きた人間が、「阿部次郎を上限とし、芥川龍之介を下限とする世代の中間にいた」と考えられる「私」に向って書かれた。明治の人間の栄光と悲劇を語る遺書だったのである」という見解が提示されている。「公的な価値に対する漱石の関心」という著者の観点は、先生の罪の自覚から贖罪としての自決に至る展開を、とかくその「自由と独立と己れ」に充ちた公私の問題として理解しがちな趨勢に対して、一つの問題提起と言えよう。そして、その結文である「こゝろ」は主題の明確な、結晶のように美しい作品というのが通説だが、個人の死と公的な殉死を重ね合わせた発想を理解するためには、明治終末の劇にまで遡行して、それを追体験するという努力が要請されるのである」という提言には耳を傾けたい。

漱石文学の展開は、脈々と流れる大河に似て流れているが、読者はそのどこかに自分に切迫してくる問題を見出すはずで、漱石文学年齢をみたいものがあるように思われる。今、私は「行人」においてそれをみている者であるが、したがって、「こゝろ」以降の作品は、正直なところ何処か実感に欠ける形でしか読み得ない思いが常になっている。誠実な、著者の漱石論である本書を読み進みながら、そうした感じをまた確認したことであった。

(昭和五十九年一月、桜楓社刊 四八〇〇円)